

4 幼児期の道徳性の発達を促す経験

(1) 大人による働き掛け

幼児は、基本的に大人の言動に基づいて行ってよいことと悪いことを学んでいく。行ってよいことと悪いことをはっきり示していく必要がある。ただし、大人の権威・服従関係に基づいて一方的に教え込む関係に偏ってしまうことは、他律的傾向を強めることになってしまう。

大人が他者の意図や感情に気付かせるように働き掛けをしたり、自分の視点とは異なった視点、特に他者の視点から考えるように促すことにより、道徳性の発達は進むのである。なぜ悪いのか、なぜ守る必要があるのかを、幼児にも分かるように説明することが必要である。

(2) 仲間とのやり取り

幼児が自分で考え、自分で行うようにする上では、対等な仲間とのやり取りが重要である。友達と共に生活し、遊ぶ中では、相互の欲求が対立することも多く、けんかやトラブルが発生することも多い。いざこざや葛藤を経験することにより、幼児は自他の立場が違いうこと、他者も自分と同じようにそれぞれの意志や欲求、感情をもっていて、それは自分のものと異なることに気付いていく。

いざこざを解決していく上で、きまりの必要性を理解する。仲間とのやり取りの楽しさから、経験を共有して親しみを感じる友達、情緒的な一体感をもてる友達ができることにより、共感や思いやりの気持ちをもちやすくなる。

よい仲間関係をもつことが道徳的行動を動機づける上で重要である。

(3) 他者との人間関係

大人からの働き掛けを受け入れられるかどうかには、幼児と大人との人間関係が深くかわり、幼児が基本的に安定感をもっていることが必要である。

自分を大切にし、共感的に対応してくれる人がいて、自分の気持ちは分かってもらえると思えるときに、幼児は他者の気持ちも考えようとする。

(4) 自分でやり遂げる経験

思いやりや行動の発達を促す上で重要なのは、自分がよい行動をした喜びや誇りを感じさせること、「自分の意志で行動し、自分でやり遂げる」ことの経験も必要である。

ルールを守ろうとする気持ちや、よいことをしようという気持ちをもつためには、やり遂げた充実感、自己肯定感、自信が必要である。

幼児は興味や関心をもっているなことを行う中で、自己を抑えつつよりよい方法を見付けていく。このことは、幼児期の道徳性の発達だけではなく、将来にわたって、人間として自分らしくよりよく生きていくためにも必要な体験といえる。